

難民のために、難民とともに

www.japanforunhcr.org



With You

国連UNHCR協会ニュースレター[ウィズ・ユー]

2019年6月 | 第41号



特集

モスル解放後のイラクは今



モスル

古代文明を育んだ町が恐怖の町へ、
そして廃墟に。

イラク北部・モスル。チグリス川が町を東西に分ける、メソポタミア文明を育んだ歴史的な町です。イラク第二の都市であるその美しい町を、2014年、過激派組織ISISが制圧し、残虐行為を繰り返して約3年間市民を苦しめました。2016年、政府軍はモスル奪還のため軍事攻撃を開始。多くの犠牲者を出した苛烈な戦闘の後、2017年7月、ついにモスルの解放が宣言されました。あれから2年近く。瓦礫の山となったモスルの町の復興は進んでいるのか、そして市民はどんな状況なのか。イラクの現実をお伝えします。

2017年6月23日、モスル旧市街の戦闘の中、歩いて避難する人々
©UNHCR / Cengiz Yar

「私がこれまで見たUNHCRの現場の中で、最悪の破壊状態です」アンジェリーナ・ジョリー特使

戦闘終結後1年近くたつ2018年6月、モスル西部を訪問したアンジェリーナ・ジョリーUNHCR特使。彼女の背後の瓦礫にはまだ不発弾や遺体が埋まっています。



「家も娘の命も失ってしまいました」モハメド(47歳)

破壊された自宅の前で、ジョリー特使と話すモハメドと家族。迫撃砲が家を直撃、17歳の娘は重傷を負い、病院に運びましたが治療が受けられず、出血多量で亡くなりました。「食べ物は必ず誰かに分けてあげる、やさしい子でした。」と涙ながらに話しました。

2014年6月

2016年10月

2017年7月

モスル制圧

過激派組織による略奪、暴力、強姦など市民への残虐行為と支配が始まる。UNHCRはモスルの事務所を閉鎖、隣のエルビル県の事務所から職員を派遣して支援にあたる

イラク軍がモスル奪還作戦開始

UNHCRは生活に不可欠な援助物資や緊急シェルターキット等を配布、人々の家の修復支援を開始

モスル解放宣言

市民の帰還が始まり、UNHCRは生活に不可欠な援助物資や緊急シェルターキット等を配布、人々の家の修復支援を開始

イラク国内で避難する人

174万4980人

避難先から帰還した人

421万1982人

シリア難民

25万3672人

出典:UNHCR Iraq Fact Sheet April 2019



2019年3月、モスルから逃れてきた人々の暮らすシャリヤ避難キャンプ。毎月あった食糧支援は45日に一度に削減、電気もほとんどなく、人々は日々に厳しい貧困生活を訴えました。

UNHCRのイラクにおける援助活動

モスルが解放されて2年近く。家を破壊され、帰りたくても帰れない人々、治安が悪く水や電気もないのを承知で、やり直そうと決意しモスルへ戻った人々。どちらを選んでも険しい道のりです。またイラクには、隣国シリアから戦闘を逃れてきた難民も多く暮らしています。多くの人が支援を待つ中、UNHCRは以下のような援助活動に尽力しています。

難民、国内避難民の保護

子どもの保護、性暴力の被害者の保護と予防、心のケア、難民登録、身分証明書の再発行などの法的支援、家族の再会支援など

支援物資の提供

水、毛布、マット、調理器具、ソーラーランタンなど生活に不可欠な物資を提供

シェルター支援

シェルターの提供、緊急テントの改良(コンクリートの土台やブロック塀、台所、トイレ、シャワー等の設置など)、より耐久性のあるシェルターの提供

その他

学校の設備の改善(手洗い場やトイレなど)、給水設備の設置、道路の建設など

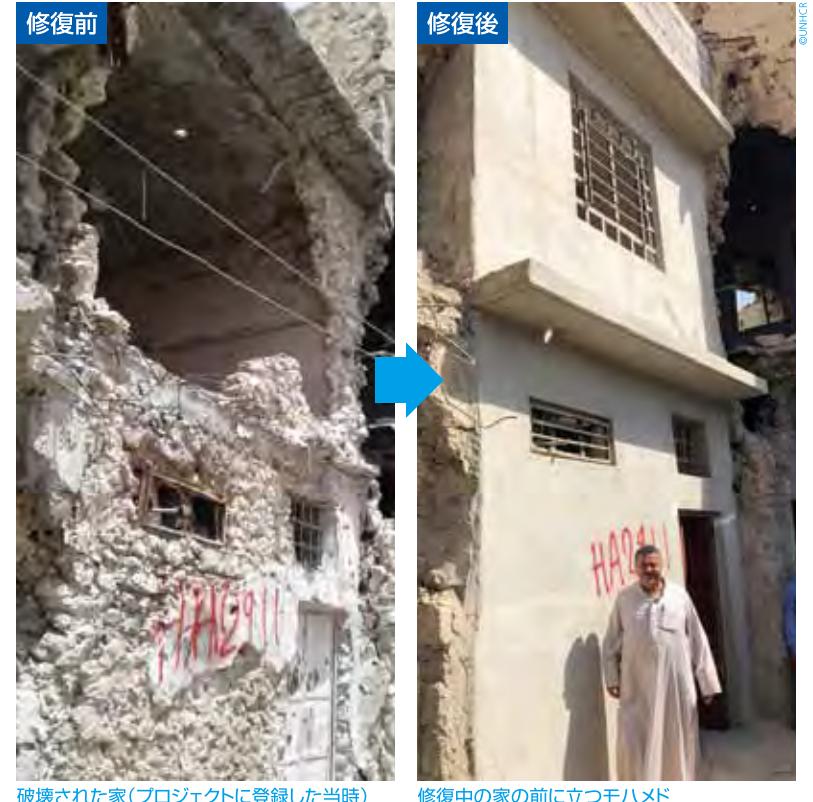
人々を救うUNHCRのシェルター支援

<1>家の修復のための現金給付

モスルでは戦闘で家や学校、病院など多くが破壊されたままです。家を失った人々にとって、ます何よりも安全な住居を確保する支援が必要です。そこでUNHCRは「Cash for Shelter」という現金給付プロジェクトを開始。帰還民へ家の改修費の支給と研修を実施し、各家庭が必要な資材を買い建設業者を選んで、家族の状況や希望に合わせ家の修復を進めます。新たな生活を始める基盤を、人々自らが築いていくのです。

モハメド一家 壁に空いた大きな穴も修復

モハマドは10人家族を養っていましたが、障がいを負って働けなくなった上、ガンを患う娘の治療にお金がかかり、非常に困窮した状況でした。避難先からモスルに戻ると、家はISISの兵士の住居として使用され、空爆で激しく損壊していました。最低限の補修にも、2868USドル(約32万円)が必要だったため、モハメドは「Cash for shelter」プロジェクトに登録。その後支援を受けて家の修理を進めています。写真は修復の60%が終わったところです。



<2>中長期型シェルター(RHU*)の提供

UNHCRは、一刻を争う緊急時には「緊急用テント」を提供するほか、避難生活が長期化した人々に、より耐久性の高いシェルターも提供します。イラクでは夏は気温が50°C以上、冬は氷点下になることもある過酷な気候です。RHUはこうした気候に対応し、約3年の耐久性を持つシェルターです。 *Refugee Housing Unit



孤児を引き取った一家に新しい家を!

カーリドは5人の子の父でしたが、政府の職員だったため、ISISの占領時に処刑されてしまいました。その後、妻と子どもたちは避難しましたが、モスル奪還のための爆撃で、妻も亡くなってしまったのです。両親を失った子どもたちを引き取ったのは叔父のジャダーン一家でした。UNHCRは、家は壊され自分たちの子どもに加え5人の子どもを育てる一家のために、2棟のRHUを支給。過酷な暮らしを大きく改善しました。

国連UNHCR協会 イラク視察レポート

2019年3月、事務局長の星野をはじめ、当協会の職員4名がイラクでUNHCRの活動の最前線を視察しました。時間が許す限り、避難民やシリア難民に会い生の声に耳を傾けた4日間のレポートです。



食糧も電気もない暮らし。ヤジディ教徒・シーリーンとジュンディの一家

シャリヤ国内避難民キャンプで私たちを迎えてくれた女性は、シーリーン(55歳)。「私はシンジアル出身です」と自己紹介された瞬間、はっとしました。その地域はまさに、ISISに長く迫害を受けてきたヤジディ教徒の村だったからです。夫のジュンディ(66歳)は二度の脳梗塞のために半身不随で言葉も話せず、ずっとベッドに横たわったまま、私たちのインタビューに耳を傾けていました。シーリーンは、食糧も不足し電気もない厳しい暮らしの中で懸命に夫を支えていました。月に2回薬を買いついで、結婚した息子からの助けてなんとか医療費を捻出しているとのことでした。



言葉を発しないまま、涙した夫

別れ際にジュンディの枕元で「ありがとうございました」と声をかけると、言葉にならない中うめくようにして、顔をくしゃくしゃにして涙ぐんでいました。この簡素なテントにただ寝かされ、何もできない生活はどれだけ苦しいことか。本当は何と言ったかったのだろう…と、今も胸が痛みます。



一家が暮らすテント。電気は通っておらず、昼でも中は薄暗い

「ヤジディ教徒の苦しみは終わっていません」

ノーベル平和賞受賞 ナディア・ムラドさん

2018年、ノーベル平和賞を受賞したムラドさんも、イラク北部シンジアル地方出身のヤジディ教徒です。ムラドさんはISISに母や兄弟を殺され、自身は性奴隸となり耐え難い傷を負いました。ドイツへ逃れた今、国連親善大使として世界中でこの問題を伝え、正義と支援を訴える活動に尽力しています。



映画『ナディアの誓い - On Her Shoulders』より

イラク視察レポート

「誰にも、僕が見てきたものを見てほしくないんだ」

アフマド・ナセル*(26歳・シリア出身) *保護上の理由により仮名にしています

難民キャンプでインタビューに応じてくれたのは、シリアからトルコ、そしてイラクの間を転々と逃れた青年でした。国境で捕まり投獄されたり、所持品を全て盗まれ一文無しとなり、ほら穴で夜を明かしたり…。それはまさに、命がけの壮絶な旅でした。

「僕はダマスカスの大学で英文学を勉強していました。でも紛争で大学生が逮捕されるなど状況が悪化したため、家族とハサケへ逃れたのです。それから両親を残し、野宿しながら歩いてトルコへ逃れました。その後両親に会うためシリアへ帰ったのですが、帰りに国境で捕まり監獄に入れられたんです。なんとか2日で脱出しましたが、そこでどんなひどいものを見たのか、どうやって出たのかは言えません。携帯は没収され、密入国業者には鼻を折られました」

「2012年頃にはアレッポに行ったのですが、激しい戦闘下でお金もなく路上で寝るなど大変でした。ある政党に軍隊に入るよう再三勧説され、断ると4人の男が家まで脅しに来ました。僕は絶対に戦争には加わりたくなかった。2日間叔母の家へ隠れ、密入国業者を見つけトルコへ向かいました。しかし、国境を前に突然置き去りにされたのです。所持品を全て盗まれ、ほら穴で夜を明かした日もありました」

「その後結局イラクに逃れましたが仕事がなく、再度トルコへ出発しました。でも国境で、兵士に『イラクへ戻らなければ撃つ』と言われたのです。戻る道で親切なクルド人が車に乗せてくれ、最終的にこのキャンプにたどり着いたのです」



シリアから国境を越えイラク北部へ避難する人々(2013年)



破壊されたアレッポの町並み

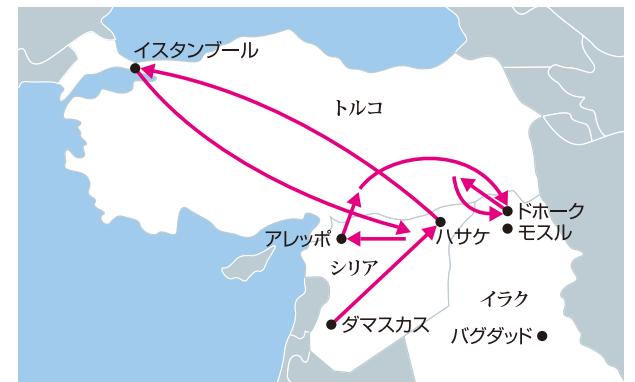


©Kei Sato Dialogue for People

「これ以上は言えない」「とても描写できない」。途中アフマドは何度も口をつぐみました。3か国を何度も行き来し死の危険にさらされてきた彼。キャンプの生活は悪くないよ、という言葉に少し安堵しましたが、もう7年も家族に会っていないと顔を曇らせました。

「僕が見てきたものは、誰にも見てほしくない」と何度も繰り返した彼。彼が見てしまったものがどんな地獄だったのか。それを語ることは最後までありませんでした。

アフマドの避難した道のり

グローバルキャンペーン
「難民と進む20億キロメートル」展開中!

UNHCRは世界27か国で展開するグローバルキャンペーン、「難民と進む20億キロメートル～命を守るワンステップ～」を展開中です。アフマドをはじめ、世界の難民が安全を求めて1年間に歩く距離は、計20億キロにも及びます。この歩みを世界の人々と共に体験し、世界全体で20億キロ到達を目指して進むことで、難民の苦難への理解や連帯感を感じていただくことを目的としたキャンペーンです。ぜひ皆様もご参加ください! <https://stepwithrefugees.org/ja-jp/>

イラク視察レポート

「私たちのことを忘れないで」

イラクの子どもたちからのメッセージ

今回の視察前に、名古屋の市邨高等学校の皆さんから、イラクの子どもたちへのメッセージの寄せ書きをお預かりしていました。日頃から難民問題に高い関心を寄せ、学校で難民への募金活動を行うなど、温かいご支援をくださっている学校です。UNHCRイラク事務所を通して事前に了承を得て、そのメッセージを手渡しする日がやってきました。



©Haru Matsuno

たくさんの生徒や保護者の皆さん、校長先生はじめ先生方のご協力で制作された寄せ書きメッセージ(写真提供:担当の松野至先生)

冷たい小雨の降る午後、バハルカ避難民キャンプで私たちを待っていたのは中学校の女子生徒たち(男子は午前に授業を受けるため、残念ながら会えませんでした)。この中学校は男子が250人、女子が65人。中学校へ通える女の子は限られていることが分かります。太陽光発電は壊れて電気はなく、暖房もないという厳しい環境です。

生徒たちがみな手に日の丸の旗などを掲げ、始まった歓迎のセレモニー。事務局長の星野から寄せ書きをお渡しすると、お礼に子どもたちが歌を歌ってくれました。それは、イラクの国歌とクルドの国歌でした。この地域はエルビルというクルド人自治区です。「国を持たない最大の民族」とも言われるクルドの人々にとって、独立は長年の悲願。彼らが受けた苛烈な弾圧の歴史が頭をよぎりました。そして、イラクの子どもたちが歌う二つの国歌を聞くことができたことを、とてもかけがえなく思いました。

イラク視察を終えて

モスルからの避難民の家族へのインタビューが終わった直後のことです。それまでずっと黙っていた女性たちが私たちを取り囲み、口々に何かを訴え始めました。言葉が通じないので、懸命に何かを伝えようとしている…。テントを出ようとしていた職員を急いで呼び止め通訳してもらうと、水が不足してどんなに大変かを説明していると言います。



©UNHCR / Irene Trajeda

日の丸の旗や歌で歓迎してくれた生徒たち

その後、生徒たちから私たちに託されたもの…、それは、写真のTシャツです。表には色とりどりの手形と、そして裏には「Don't Forget Us!(私たちを忘れないで!)」のメッセージ。そのメッセージを見た瞬間、あえて聞こえのよい言葉を選ばなかった子どもたちの切実な思いを感じました。



©UNHCR / Irene Trajeda

イラクの子どもたちからのメッセージが書かれたTシャツ

死ぬほどの思いをし、ISISからモスルが解放されても、多くの子どもたちは家に帰れず、状況はなかなか改善されないままです。しかし国際社会の関心は一気に薄れ、支援は減り続ける一方の現実。きっと子どもたちは、それを情報や数字としてではなく、苦しくなる生活を通じて実感しているのではと感じました。

*より詳しいイラク視察のレポートは、以下からご覧いただけます
https://www.japanforunhcr.org/lp/iraq_report

食べ物や水が足りないこと、電気も届かないこと。子どもを抱える母親たちにとってどれほど深刻な問題でしょうか。出会った人々はみな、政府や援助機関からの減っていく支援に危機感をつのらせていました。「日本に帰ったら、この過酷な状況とイラクの人々の切実な声を伝え、一刻も早く支援を届けなければいけない」。私たちは思いを新たにして、イラクを後にしました。

お知らせ 毎月のご支援「毎月俱楽部」の名称が変わりました!

イラクをはじめ、世界各地のUNHCRの援助活動になくてはならない継続支援「毎月俱楽部」。難民を一時的ではなく、継続して支えることができる支援方法で、UNHCRの世界中の活動を力強く支えています。このたび、その支援方法の名称が「国連難民センター」になりました。ぜひこの機会に、あなたもご参加ください!



今号の表紙



モスル奪還直後の2017年8月、モスル西部アルレサラで学校から帰る少年。西部は最後までISISが立てこもり、最も激しく破壊された地域。現在も避難民の帰還はあまり進んでいない。

CHARITY TOKYO MARATHON 2020

東京マラソン2020チャリティ

ご寄付およびチャリティランナーの募集が始まります。当協会は、皆様からのご寄付を難民の家族を厳しい環境から守るシェルターの設置に役立たせていただきます。

2020年3月1日(日)開催予定

◎7月上旬申し込み開始

詳しくは以下ウェブサイトをご確認ください

◎東京マラソン2020チャリティ公式ウェブサイト

<https://www.marathon.tokyo/charity/>

国連UNHCR協会は東京マラソン2020チャリティ事業の寄付先団体です。

With You

国連UNHCR協会ニュースレター

【ウィズ・ユー】

第41号 | 2019年6月

発行

特定非営利活動法人 国連UNHCR協会
【国連難民高等弁務官事務所・日本委員会】

〒107-0062

東京都港区南青山6-10-11

ウェスレーセンター3F

Tel.0120-540-732

Fax.03-3499-2273

www.japanforunhcr.org

編集

国連UNHCR協会

デザイン・ディレクター
中川憲造

デザイン
森上暉 | 高木沙織 | NDCグラフィックス

ダイアグラム・デザイン
インフォグラム ©

印刷
凸版印刷株式会社

©Japan for UNHCR
本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

シ

リア砂漠のど真ん中、シリア・ヨルダン・イラクにまたがる荒地にルクバンという国境地域があります。そこには紛争を逃れたシリア避難民5万人が避難しています。そのはずれにあるUNHCRの小さなフィールド事務所の所長として、緊急医療や支援物資を届けるのが私の仕事です。

ルクバンの国連の診療所には、毎日のように急患が訪れます。避難民キャンプ内には食糧も毛布も病院もありません。母に連れられてやってきた10代の少女は、妊娠中の大量出血ですでに意識が混濁していました。輸血のできない砂漠の病院では帝王切開はできず、すでに合併症を併発していれば母子ともに危ない。凍りつく砂漠の道を3時間、最寄のヨルダンの病院

まで緊急輸送しました。2年半以上にわたって過ごした私の日常の一片です。

「難民」というのはラベルのひとつにすぎません。UNHCRに就職する直前の2011年、私はあるNGOで東日本大震災の被災地支援に携わらせてもらっていました。まだ震災直後の時期で、地元の方の協力を得て炊き出しをしたり、軽トラックで避難所に支援物資を運んだり。あまりに困難な状況に絶望し、被災された方々の辛抱強さに勇気付けられながら、各地の避難所をまわりました。

南三陸の避難所を訪れたとき、私が国連難民機関に就職することになっていることを知った年配の漁師の方が、こうつぶやきました。「私も難民になってしまったかあ…」もちろんその人が本来の意味での難民になったわけでもなく、場を和まそうと言って下さった一言であったことは間違いたりません。でも、その方の言葉の後ろにある複雑な思いはどうほどのものだったでしょう。

人は誰しも望んで難民になるわけではあ

From the Field

難民支援の現場から

19

副島知哉 そえじま・ともや



ルクバンの国連診療所を共同運営する、他国連機関のヨルダン人職員とともに

りません。国連や庇護国が誰かを難民にするわけでもありません。あくまで国連や庇護国は、簡単に言えば避難せざるをえなかった人たちの本来あるべき姿(地位)を「認める」だけです。たとえ認められたとしても、大切な

生活や家族を失った辛さが消えることはなく、その上に慣れない避難先での生活というのは想像を絶するほど大きな負担です。一部の地域では避難先で生命の危険にさらされることさえ珍しくありません。「難民」というラベルでは推し量ることすらできない一人ひとりの辛い記憶が、その表情の背後に垣間見えます。

これまでのUNHCRの仕事を通じて何人の難民に出会ってきました。治安の悪いソマリ難民キャンプで家族を支えようとする若者、親とはぐれたあげく不法

滞在でベイルートの刑務所に拘留されてしまったシリア難民の小学生、ヨルダンの田舎で腰を痛めながら肉体労働をして避難生活を送る老夫婦。幸い先の少女は、母子ともに生命の危機は免れました。「でこぼこ道を走ったおかげでこの子は出てこれたんだと思います。」そうはにかんで言う彼女の表情に、あの日出会った南三陸の人たちの辛抱強さを見た気がしました。

砂漠の事務所での2年半の勤務も終わりを迎え、7月からUNHCRバングラデシュ事務所での仕事が始まります。たとえ職員ひとりができるることは限られているとしても、UNHCRの活動を応援してくださる全ての方の協力に支えられて、今後も最前線で難民支援に取り組んでいきたいと思っています。

プロフィール……UNHCRヨルダン・ルウェイシェド事務所 所長。オックスフォード大学大学院卒(強制移住学修士)。UNHCRに採用され、ケニア、レバノン、ヨルダンでの勤務を経て2016年10月より現職。シリア難民への支援物資配給および緊急医療支援に従事する。

6月20日は「世界難民の日」!

日本各地で難民へ思いを寄せさせていただくために、札幌、東京、神戸、岡山など全国14か所のモニュメントが「国連ブルー」にライトアップされます。6月22日(土)は、東京スカイツリーでスタンプラリーやウォーキングレッスン等のイベントも開催します。ぜひ奮ってご参加ください!

<https://www.japanforunhcr.org/archives/wrd2019>

